

### 3、加茂町銭司春日神社の宮座と行事

横出 洋二 (技師)

#### はじめに

南山城地方の村落祭祀は近畿の他府県同様宮座組織によって執り行われてきたところが多く、正月の予祝行事や秋まつりの芸能などを多彩に伝承してきた。同地方の宮座については戦前『京都古習誌』<sup>(注1)</sup>で井上頼寿氏が網羅的に報告している。しかし、報告された行事が調査時に行われていたのか、すでに廃絶していたのか不明なところもあり、掲載史料が確かなものか疑問な点もある。しかし、最近まで同書が半ば唯一の宮座の報告でこれに頼った著述も多かった。最近<sup>(注2)</sup>は新たな現地調査のもとづく報告もされるようになり、少しづつ個別的な宮座の組織や行事が明らかにされつつある。

そこで本稿では宮座の個別事例報告の充実のため、当屋祭祀や芸能を比較的によく残している銭司春日神社西座の組織や芸能の現況と変容について報告するとともに、西座を含む周辺の宮座行事の地域的な位置づけについて考えてみたい。

#### 1、銭司西座の祭祀組織

銭司は加茂町の東端に位置し、地区の西は同町井平尾、東は和東町木屋、北は同町撰原

と接し、南は東から西へ木津川がながれ、これと並行して国道163号線が通っている。集落、耕地ともに河岸段丘状の斜面にあり、平地は少ない。稲作の他、お茶が主要な産物である。集落は耕地をはさんで西と東に分かれており、西をニシテ、東をヒガシテと呼ぶ。

平安・鎌倉時代は銭司荘といい、東大寺尊勝院<sup>(注3)</sup>のほか宣陽門院が領主であった。中世の歴史は良く分からないが、神社に残されている棟札の中に長祿4(1460)年のものがあり、社殿の築造・遷宮費用を記した中に「十人ヲトナタチノトリタテ」とあり、当時大人を指導層とした惣村が形成されていたことをうかがわせる。近世は藤堂藩領として、石高約320石、戸数76軒の村だった。

氏神の春日神社はニシテとヒガシテの間にある福田寺の横の道を北に登っていくと山の中腹にある。春日造りの本殿に天兒屋根命・武甕槌命・経津主命がまつられている。本殿両脇には3棟の末社があり、向かって右に鹿島社と熊野社の2棟があり、左に八幡宮・八柱社・市杵嶋社・蛭子社が1棟に合祀されている。

<sup>(注4)</sup>古老によると、本殿は幕末に奈良春日若宮の遷宮の後旧社殿を移したということである。



銭司地域図 (● ホウジタテの位置 — カンジョウナワ)

また、それ以前はヒミズサンという神さんが祭神だったという。今は神社北隣の妙見宮境内にまつられ、神社には合祀されている末社の横に祠を載せていた石が残っている。

現在の祭祀組織は氏子と宮座と二つある。氏子は地区住民全戸で組織されており、氏子総代が責任者である。宮司は同町の岡田鴨神社宮司が兼務している。氏子の中から年齢順に宮守みやもりが選ばれる。任期は1年で以下の仕事をする。

イ、毎月1日と15日に神社に参拝し、掃除をする。参拝したら太鼓を叩いて地区住民に知らせる。

ロ、大晦日に神社の正月飾りをする。

ハ、大晦日の夜から1月4日朝まで神社に参籠する。

ニ、9月30日のハウジタテ（後述）

氏子の行事としては1月4日のカンジョウナワ奉納と10月17日の秋まつり（公祭）がある。カンジョウナワはニシテとヒガシテから家の並び順に5人づつで縄をない、参拝道を神社に登りきったところにあるシイノキに掛け、宮守が祝詞を奏状する。

宮座は西座と呼び、23戸が加入している。<sup>(注5)</sup>座衆は氏子組織にも入っており、座外の氏子同様に宮守を務め、氏子総代にも選出され、氏子の行事に参加する。

座の長老組織は年寄5人で構成され、宮座の運営と行事を指導する。任期は7年である。一・二老ごんのかみを権守といい、一老は秋まつりで神主を務め、二老は会計をする。一老を務めると1年休んで二老となる決まりで、このため年寄になってすぐ一老を務める人もいる。

座の行事は2月11日の二月座・3月上旬の定例集会・9月10日の九月座・9月14日のハウジタテ・10月16、17日の秋まつりがある。二月座と九月座は本来正月座、八月座と言ったが、新暦に合わせて呼び方を変えた。また、11月1日に十一月座（霜月座）、十二月座（師走座）があったが、昭和44年に廃止され

た。

座入りの順に当屋があたり、まつりの役や座での年寄の饗応などを1年間務める。10月17日のまつりの後、当渡しをして次の当屋に引き継ぐ。正式な交代は二月座以降である。

座入りは17才のとき行われ、二月座で座入りの式をする。朝9時に座入りの者と年寄が集まり、神社に参拝する。御神酒・スルメを供えて一老が祝詞を奏状する。当屋に戻って年寄にあいさつをし、一老が座入りを認める旨を述べる。その後一老に酒を注ぎ、返杯を受ける。座入りした者は「西の座入順番附」に記される。これは一老所持の帳箱に保管されている。古いものは「西の座入順番附覚」がある。表題には文化14年の年号があり、昭和51年までの座入りした人の名が記されている。また、帳箱の蓋裏には「文政九 歳／西座帳箱二月十一日相勤／戌二月十一日 日」と記す。

また、二月座に権守・年寄の交代が確認され、3月末に正式交代する。定例集会では会計報告がなされ、必要事項が協議される。

次に『京都古習誌』の記載と今回の聞き取り調査によって戦前の宮座組織について触れてみたい。

戦前は東座もあり、約20軒ほどで構成されていた。両座の座衆の構成はニシテ、ヒガシテといった地域には関係なく、家筋で決っていた。銭司の戸数は50前後であり、ほとんどの家は西、東いずれかの宮座に入っていた。そのため宮座の組織や行事は村落組織とも深く関わっていた。たとえば、座入りを済ませると村のデアイ、ツキアイで一人前とみなされ、共同労働では不足金を払わなくてもよくなる。座入り前だと同じ量の仕事をしても年齢に応じて不足金を払った。また、座入りにはイリクとして玄米5升を宮座に納めた。

各座の年寄5人を合わせて10人衆と呼んだ。任期は西座が10年東座が8年であった。長禄4年と文明15（1483）年の棟札に費用を出し

た者の中に権守のつくものが何人もおり、10人衆が「ヲトナ十人」の名残をとどめたものであればこの宮座の古さがうかがえる。

宮守も宮座の役であり、西座・東座交代に一老・二老を除く年寄が一年間務めた。秋まつりの神主も一老ではなく、宮守が務め、「宮守には、神様がついてござる」といわれた。年末には荷桶をかついで各家をまわり相応の米を手当として集めた。しかし、宮座の行事は秋まつりにおける神社の行事以外別々に行い、当屋も両座別にたった。

東座は戦前の農地解放による座田の消失を期に解散した。西座では、座田は5年を満期として小作に出し、小作宛米を座の収入とした。また当屋附属の座田もあり、この収入は当屋のものとなった。<sup>(注6)</sup>

## 2、銭司西座の秋まつり行事

西座では、現在秋まつりが主な行事であり、以下その行事内容について日を追ってみてみる。

イ、九月座（9月10日） 当屋に権守が夜集まり、秋まつりの打ち合わせをする。特に儀式的なことではなく、食事も簡素化し、茶菓子程度になっている。

ロ、ホウジタテ（9月14日） 当屋が銭司の西、井平尾との境である字ウマノセにホウジを挿す行事である。ホウジは幣のついた榊の枝である。昼間宮守が用意し、本殿に供えて祝詞を奏状する。日が暮れてから当屋は神社に行き供えてあるホウジをいただいてから挿しに行く。挿し終わるまでしゃべってはいけないと云われている。挿す場所は隣村との境とだけ云われており、特に決まった地点は伝えられていない。なお、東の木屋との境は宮守が挿す。

ハ、呼び使い まつりの4・5日前に当屋が年寄や親戚にまつりの手伝いを頼みに行く。

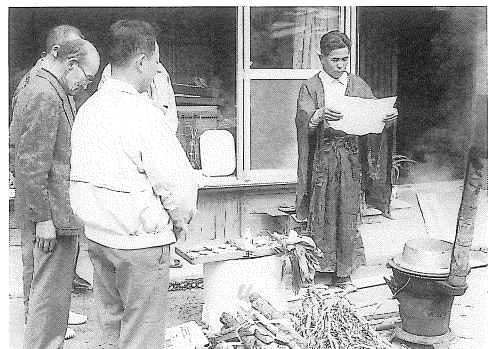
ニ、宵宮（10月16日） この日は、午前中が準備、午後が湯立て・御供つき、夕方に宵

宮まつりがある。

準備 朝8時頃年寄り、手伝い人が当屋に集まる。当屋敷地の入口には注連縄を張り、西座の提灯一對を吊っておく。当屋は浄紙一折りを一人づつ渡し、権守には扇子を渡す。当屋も扇子をまつりの間持つ。次に、当屋が木津川で汲んできた水で手を洗い浄めてから、幡御幣・幡片御幣・湯立御幣・相撲御幣そして神饌のうち御菜・御菓子・御汁を作る。

湯立 昼食後、当屋の庭で湯立をする。まず一老は折烏帽子を被り、草履を履き、素襖を着て神社に参拝する。背中には扇子を挿す。大祓の祝詞を奏上してから当屋に戻り、座敷に敷かれた菰の上に座り、二老から酒肴で接待を受ける。「一老には神さんがついている」と云われ、神社に行くことは神迎えと考えられる。

接待の後、一老は土を踏まないように、土間から庭に据えられた湯釜の前まで敷かれた板の上を歩いて行く。そして、その横に置かれたローソク立てに火を着け、12個の土器に御神酒を注ぐ。次に笹と湯立御幣を持って湯につけ「の」字を書くようにまわしてから上げ、滴を前方に散らしながら振り、当屋・年寄・手伝い人を祓う。この所作を3回繰り返してから再び神社に行き、祝詞を奏上する。  
御供つき 一老が神社に行っている間、当屋では湯立の釜で餅米を蒸す。土間の台所とこの間の戸にシメナワを張り、御供つき終了まで座敷や庭へ女性の立ち入りを禁止する。



当屋で祝詞を唱える一老

名 称		内 容
御 幣	幡御幣	長さ8尺のシノブ竹2本を束ね、先に両幣をつける。
	幡片御幣	長さ8尺のシノブ竹2本を束ね、先に片幣と、トサカ・打散をつける。トサカは藁を束ねた上に12本の5寸の竹串をさしたもので、串には三角の白紙がつけられている。打散は2合の洗米を白紙に包んで水引でくくったもので、祭礼後一老に渡す。
	湯立御幣	長さ1尺2寸のシノブ竹に両幣をつける。宵宮の湯立のとき笹と一緒に持ち、湯につけ「の」字を書き、参列者を祓う。
	神上げ御幣	湯立御幣と同じ。神上げの湯立で使う。
	相撲御幣	片幣で先に輪がついており、相撲取りが耳に掛ける。
神 饌	御菜	山芋・大根・ごぼう・人参・蓮根の小片を白紙に包んだもの。12袋つくる。
	御菓子	柿・栗・梨・柘榴・棗の小片を白紙で包んだもの。12袋つくる
	御汁	小さい茄子を花剥きにして白紙に包んだもの。7袋つくる。
	本御供	本御供5合の蒸し米を大一つと、小6つに分け、円錐形に握って白紙を巻き、藁ひもでくくったもの。
	御供餅	2升の米を杵でついた丸餅。70個ほどつくり、祭礼後座中に配る。芸能の演者には多く渡す。

#### 銭司西座御幣、神饌一覧

一老が戻ると座敷で本御供のモッソをつくる。まな板を挟んで素襖を着て、紙のマスクをした当屋と一老が座る。蒸しあがった5合の餅米をまな板の上に小判型に伸べる。次に当屋がしゃもじで大1つと小6つに7分割する。当屋が大を手で円錐形に握る。そして小を2人で同じく円錐形に握り、年寄・手伝い人が三角に折った半紙を巻き藁ひもでくくる。終わると、土間で当屋と年寄の一人が餅つきをする。当屋が横杵でつき、日本手拭を姉さん被りした年寄がこね、他の当屋・手伝い人が丸める。2升の餅米で70個ほどつくる。餅つきが終わるとシメナワを外して女人禁制を解き、しばらく休憩する。

**宵宮のまつり** 午後4時頃、当屋・一老・年寄の順に神社に行く。神社には、先に手伝い人が行き本殿石段下に提灯を一对立て、舞台には幕を張り、荒菰を敷いておく。当屋・一老・二老は素襖を着て、折烏帽子を被る。神社に着くと、太鼓を鳴らして本殿前に参列し、

拝礼して一老が祝詞を奏上する。終わると舞台上に座し、当屋の接待で御神酒と枝豆で直礼をする。

直礼の途中で獅子舞とオドリが演じられる。演者は座入り順に当たり、一老が座入り帳をみて該当者に依頼する。獅子舞は、まず当屋が本殿石段下に太鼓を持って立つ。そして獅子は本殿に向かって拝礼してから当屋の叩く太鼓の音に合わせて本殿下の広場を3周し、本殿に拝礼して終わる。オドリの演者は3人でオドリコという。獅子頭の役が鼻高面を付けて鼓を、当屋が太鼓を持ち、獅子の後ろの役がビンザサラを持つ。本殿に向かって拝礼してから各楽器を鳴らしながら広場を3周し、本殿に拝礼して終わる。

ホ、本まつり

この日は午前中に神社で本まつりを行い、午後当屋で神あげと当渡しをする。

**本まつり** 午前7時頃、当屋へ年寄が集まり、権守・当屋・年寄の順で風呂に入って身を淨

め、朝食をいただく。朝食には慣例的に小豆粥が出される。食べ終わると、当屋が幡御幣、一老が幡片御幣、他の年寄が御神酒・神饌を持って神社に向かう。

到着すると、御幣を本殿に供え、神饌も本社・末社に供える。そして最初にゴヘイフリをする。当屋が2本の御幣を持って敷かれた板の上に立ち、後ろに年寄が並ぶ。当屋はまず御幣を「の」字にまわしてからトンと板を叩く。この所作を3回してから全員で拝礼する。次に年寄が拍手をし、「をー」というかちどきの声を発して万歳をする。最後に一老が祝詞を奏上して本殿の儀式は終わる。

神饌を下げて一同舞台上に座し、枝豆と御神酒で直礼をする。餅は後で座内の各家に配られる。直礼の途中で獅子舞・オドリ・相撲が順に演じられる。獅子舞・オドリは宵宮と同じだが、まわる回数がこの日は7回になる。

相撲は次の当屋が務める決まりとなっており、所作は以下のとおりである。

- a 当屋が槍を持って本殿石段下に立つ。
- b 裸でフンドシをした相撲取りは舞台上に座す一老の前で一礼する。
- c 当屋の前で一礼する。
- d 本殿石段下に行き、本殿に向かい拝礼する。
- e 一老から太刀を受け取って担ぎ、当屋の前に行く。
- f 太刀を当屋に差し出す。当屋は広げた扇で太刀を受け取り下に置く。
- g 本殿石段下で本殿に向かって拝礼する。
- h 当屋から再び太刀を受け取り、肩に担いで一老の前に行く。
- i 太刀に巻いてある晒し布をはずし、腹に巻く。太刀を一老に渡す。
- j 当屋の前で一礼して槍先に掛けてある相撲御幣を取って右耳に掛ける。
- k 本殿下に行き、本殿に向かって万歳を2回する。

相撲の後、神社での宮座祭祀は終わり、屋前に氏子総代・宮守他が参列して、宮司による



かちどきをあげる年寄衆



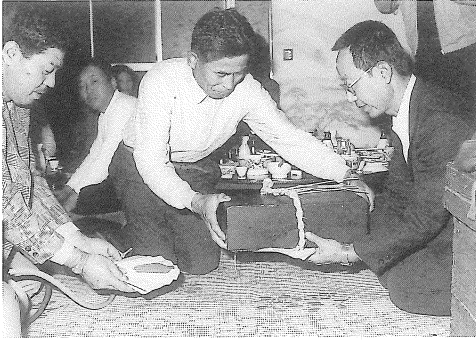
太刀をあずける相撲取り

公祭が行われる。

**神あげ** 午後1時から神あげ行事が行われる。内容は宵宮の当屋での湯立行事と同じで、一老が神社に行き、祝詞を奏上して戻り、二老に接待された後、湯立と祝詞を奏上して神社に行き、祝詞の奏上をする。ただしこの日は一老が最後に当屋を出るとき当屋が一老の襟首に釜のすすをかける。これは神さんに早く帰ってもらうためだという。

**当渡し** 一老が帰ってくると座敷で当渡しの式をする。内容は以下のとおりである。

- a 当屋と次の当屋が向かい合って座る。間には一老が座る。
- b 当屋がシメナワでくくった帳箱を広げた扇の上に載せる。
- c 一老が両方に当屋の務めの礼を述べる。



## 当わたし

d 当屋が箱を差し出し、次当屋が一老の手を介して広げた扇の上に受け取る。

箱は当屋の神棚など適当な棚の上に一年間置いておく。箱は開けてはいけないことになっている。祭祀道具は月末までに次当屋に送られる。

当渡しの後は慰労の会食が行われる。

へ、戦前のまつり

次に聞き取り調査と『京都古習誌』の記載から現行のまつりとの違いについてみてみたい。

**ホウジタテ** 東座があるときは、東の木屋との境は東座の当屋が挿しに行った。

**呼び使い** 昔は鯖と「舌状」と書いた招待状を持って年寄と手伝い人にまつりの手伝いの依頼に行った。

**垢離かき** 明治の末頃まで当屋は10月初旬に滋賀県栗太郡大石村（現大津市大石）の佐久奈度神社に日帰りで垢離かきに行った。この神社は平安時代には七瀬の祓い所の一つとして知られ、朝廷によって事あるときに臨時の祓いの神事が行われた。旧社地は瀬田川沿いに面していて、社殿裏の河原がみそぎ場であった。戦後天ヶ瀬ダム建設に伴ない背後の高台に移った。

『京都古習誌』では、まつりの1週間前に行き、当屋は垢離かきの後、川の黒石をいくつかひろってきて呼び使いのとき招待状に添えて一つずつ渡し、もらった人は毒虫よけとして台所の水壺に入れたとある。現在古老は

石のことは聞いたことはないとのことである。<sup>(注7)</sup>  
水行 明治25年の「祭祀規定」では、まつり前の3日間権守・宮守・当屋は木津川で水行するとある。

**御供つき** 御供や餅を作る手伝い人は宵宮の日暮れ後木津川で手や顔を洗い、夜通しかかって餅を作った。餅は曲げのモチノワの型に入れて作った。

**オハナジョロウ** 昭和の初期まで、当屋や神社での祭祀にオハナジョロウが参列した。これは当屋の娘か知り合いの娘がつとめた。

**ウマカケ** 幕末までオハナジョロウを乗せて馬場を走らせていたが、あるときオハナジョロウが馬から落ちて死んで中止したと伝える。今境内の外に供養の地藏がまつられている。現在、本まつりのとき本殿前で「ウオー」と年寄が叫ぶのはウマカケでの喚声を真似たものだと伝える。

**湯立** 2座のときは、神上げの湯立ては宮守が行った。『京都古習誌』では、本殿でも園市による湯立があったと記すが、園市については古老から聞くことはできなかった。

**獅子舞** 2座のときは両座隔年交代でつとめた。所作も今より激しいものだったという。また、獅子と一緒に鼻高面をつけた者が回り、笛吹きもいた。獅子に咬まれると厄除けになるという。

**オドリ** 2座のときは両座一組みづつ出て、一緒に演じた。

**相撲** 2座のときは本殿下の階段をはさんで、東西の当屋が槍を持って立った。所作には東西の相撲取りが向かい合って互いの両手を組み、上下に振るといったのがあった。

## 3、銭司西座の行事と奈良

南山城の南部は歴史的に奈良との関わりが深く、宮座行事も奈良のそれと共通するものが多いと考えられる。そこで銭司西座行事のうち相撲をとりあげ、奈良市の神事相撲と比較して見てみたい。<sup>(注8)</sup>

## イ、奈良市と銭司の神事相撲

奈良市の宮座では、神事相撲が比較的によく行われている。そのうち銭司の相撲と共通する相撲も見られる。

**手を取る** 奈良市北村の戸隠神社相撲では大人のオオズモウで相撲の所作は銭司のように向かい合って互いの両手を組み、「ヨイヨイヤ」と声を掛け合う。向かい合って手をとる所作は他にもあり、奈良市中之庄天神社では向かい合って座り、互いの両手を取って立ち上がり左に1回まわる。

奈良市邑地の水越神社では右手を握って左、右、左と3回づつまわる。

**御幣** 奈良市誓多木の八柱神社の相撲では秋祭りに子供と大人の相撲があり、大人は宮座の当屋がつとめ、所作では、銭司同様に折敷の上の御幣をとって耳に掛ける。

**まわし** 相撲取りは、多くがフンドシを着用するが、これとは別に布を持つ所がある。

奈良市西九条の倭文神社のダイスモンではまわしを太刀に巻いて肩にかついで出てくる。水越神社では、4人の相撲取りのうち2人が晒しのまわしを肩にかついで舞台上上がる。銭司の場合も晒しのまわしを巻いた太刀をかつぐ。

**万歳** 奈良市阪原の長尾神社の相撲では、所作の最後に2人の相撲取りが並んで片手をつなぎ、後ろに大きく振ってから「わー」と言って頭上高く振り上げる。天神社の相撲でも立ち上がる時「わー」と叫ぶ。銭司では最後に万歳をするが、これも同様の所作と考えられる。

以上の点から銭司の相撲は奈良市、特に市の東部の東山中に伝承されているものと同系のもので考えられる。

## ロ、春日神社若宮おんまつりの相撲

奈良市春日神社若宮のおんまつりは平安末以来大和一国のまつりとして今に至るまで盛大に行われている。現在まつりで相撲は行われていないが、江戸時代には行われていた。

享保15(1730)年の「春日若宮御祭礼図」<sup>(注9)</sup>に相撲の内容が記されており、所作の部分は次のように記す。

「相撲役人放髪に数指<sup>かずさし</sup>とて紙をさす、裸にて太刀かたげ左右方へ出、太刀をおき数指をとり神前へ投相撲をとり儀式ばかり、太刀をかたげ退く、神前へ向かひ座す、専当より褒美布かたに打かけ又出る」

これによると若宮おんまつりでも相撲は「儀式ばかり」となっており、勝負はしていなかった。

さて、以上の所作のうちいくつか現在伝承されている神事相撲との共通を見いだす。

たとえば、髪に挿した数指と呼ぶ紙を神前へ投げるとあるが、倭文神社や戸隠神社では相撲取りが矢を扇的に投げるのと同じと考える。平安時代の節会相撲では、勝つと矢を地面にさし、その数で左右の勝敗を決めたが、そのさす役を立数指<sup>かずさし</sup>と呼んだ。<sup>(注10)</sup>若宮などの紙や矢を投げるのはその所作と名称が残ったのであろう。矢を投げる点において若宮より周辺の村の神事により古い形で伝わっているのが興味深い。また、若宮では数指の紙は髪にさしたが、この紙は銭司春日神社や八柱神社の相撲取りが懸けた御幣と同様の意味もあったのではないだろうか。

次に、褒美の布を肩にかけて与えるのも先ほどの水越神社、倭文神社で肩にかけるのと共通し、銭司の晒しも肩にはかけないが、同様の褒美の布であろう。節会相撲の後の臨時<sup>(注11)</sup>の相撲で相撲取りに褒美として与えており、春日若宮おんまつりの相撲が平安時代の節会相撲の形を取り入れて行っていたことをうかがわせる。

以上のように、銭司春日神社や奈良市の相撲は春日若宮のものと同通し、これは周辺村落に直接京都等から伝播したのではなく、同地域における興福寺や春日大社の荘園支配や荘民のおんまつりの参加等によって伝わったものと考えられる。

おわりに

南山城では銭司以外で現在も神事相撲を行っているところは数カ所である。その一つ笠置町笠置の栗栖神社相撲は弓を構えた者の前を相撲取りが前後する所作をするが、同様に奈良市阪原でも基本的に弓の前を前後する所作をする。相撲以外に田楽にも奈良市東山中と同様のものがある。笠置町有市の国津神社の秋まつりの「ホーエイ」行事では、御幣の前を棒・扇子・太刀を順に持って前に3回飛ぶ。飛ぶという所作において奈良市大保の八坂神社のサンカクトビやヨコトビ・同市丹生の丹生神社のヨコトビと共通の田楽芸であろう。このように加茂町や笠置町と東山中とは地形的に連続し、山中の物資の木津川への積み出しなどを通して交流がある。宮座行事なども共通するものがあり、それは南都の社寺へとつながっていく。春日大社との関係で言えば、栗栖神社相撲で相撲取りの前で弓を構えるのはおんまつりでも行われており、また同社では流鏝馬もあり、そこで射手と同道する稚児が扇を馬上から後ろへ投げる所作もおんまつりに見られた。<sup>(注12)</sup>

以上、南山城南部の宮座行事は春日大社や興福寺・東大寺といった南都の社寺との関連をあらためて見ていく必要がある。

最後に、本稿執筆にあたり、当館講座での講演から多くの御教示をいただいた鹿谷勲氏(奈良県教育委員会)、また調査等で御協力いただいた銭司西座の石井庄蔵氏、畑中正明氏、住岡由隆氏、そして岩坂七雄氏(奈良市教育委員会)、和田光生氏(大津市歴史博物館)に感謝したい。

(注1)『京都古習誌』(館友神職会、1940)

(注2)中村彰編「天下の奇祭いごもりまつり」(涌出宮、1985)、京都民俗談話会南山城調査会『相楽の民俗』(1986)、中村彰「<神楽座>と女性」(『京都民俗』第4号、1986)、中村彰「アエーの相撲と百味の御供—南山城・

涌出宮のあきまつり」『近畿民俗』第108号、1986)、橘尚彦「相楽神社の宮座と一族」(『京都民俗』第5号、1987)、中村彰『『古習誌』その後(3)—京都府久世郡久御山町・玉田神社の宮座』(『京都民俗』第6号、1988)、横出洋二「水度神社の祭祀組織と神饌」(『近畿民具』第12輯、近畿民具学会、1988)、中村彰「東一口の宮座」(『京都民俗』、1988)、小泉芳孝「京都田辺町『佐牙神社』の宮座」(『京都民俗』第8号、1990)、京都民俗談話会「田辺町草内とその周辺の地理と民俗」(『京都民俗』第9号、1991)

その他宮座の芸能の報告書として、『京都の田楽調査報告書』(京都府教育委員会、1978)、『京都の田遊び調査報告書』(京都府教育委員会、1979)がある。

(注3)『加茂町史』第1巻古代・中世編(加茂町、1988)

(注4)戦前の宮座については銭司西座の石井庄蔵氏(大正2年生)から聞き取りをした。

(注5)一老所持の明治25年「祭祀規定西座組」には43人の名が連署されており、今より軒数が多かった。

(注6)(注5)史料

(注7)南山城では、宇治田原町奥山田の天神社の宮守が今でも佐久奈度神社に参拝し、河原の石をひろって任期中の身の守りとしている。

(注8)奈良市の相撲については『奈良市民俗芸能調査報告書—田楽・相撲・翁・御田・神楽—』(奈良市教育委員会、1990)を参照した。

(注9)『神道大系』神社卷春日(神道大系編纂会、1985)

(注10)和歌森太郎『相撲今むかし』(河出書房新社、1963)

(注11)(注10)同書

(注12)「春日若宮御祭礼図」